

Henderson, Willie: *The Origins of David Hume's Economics*

London and New York: Routledge, 2010, xviii + 222 pp.

奇妙な本である。著者の主な狙いは二つあり、一つは『人間本性論』から『人間本性論摘要』、「エッセイの書き方について」などを通じてヒュームがいかに自分の考えを読者に伝える術^{すべ}を学んでいったかというレトリックの発展を明らかにすること、もう一つは『政治論集』のテキストを（それ以前の『人間本性論』、『道徳・政治試論集』のテキストも交えながら）分析し、必ずしもヒューム研究に詳しくないが経済思想に関心のある人々にヒューム経済思想へのアクセスを与えること、である。著者が第一章で述べるように、たしかに経済学者・経済思想家たちにとって、自らの理論を読者に対してどのように伝えるのかということは重要な課題であろう。同時にそれは、ヒュームの考えや理論がこれまで経済学史家たちによってどのように伝えられてきたか、というヒュームの描かれ方・語られ方とも深く関わっている。そういう意味では、経済思想史・学史の一研究スタイルとして、本書のようなアプローチには一定の意味があるのだろう。

だが本書の最大の問題は、とりわけヒュームにおいて両者（経済思想とその伝え方・伝わり方）の間にどのような有機的・必然的なつながりがあるのかが不明確だ、という点にある。これがアダム・スミスなどを対象とするのであれば話は違ってくる。『道徳感情論』、（講義録ではあるが）「法学講義」、『国富論』という代表作ごとに彼がどのようなレトリックを駆使しているのかという議論が彼の経済学的認識の発展と密接かつ不可分に結びついていると主張することは説得的である。また、同じ関心から「天文学史」や「言語起源論」などを周縁的に扱うとしても、許容されるだろう——しかも、スミスには「修辞学講義」もある。だが、ヒュームの

ように幅広い分野で著作活動をした思想家の場合は、事情が異なる。たとえば本書第二・三章で論じられている『人間本性論』と（彼が自説を擁護するために匿名で書いた）『摘要』との関係においては、ヒュームがいかに自分の議論を「要約」しているかということと、彼の経済学的認識との間に、これといった必然的なつながりが見いだせない。したがって、ヒュームに詳しくない経済学史・思想史研究者がこれらの章を読んでも、それがヒュームの経済思想の発展にどう関わっているのかはよく分からないだろう。第四章では、ヒュームが論説「エッセイの書き方について」で貿易の比喩を用いていることがわずかに経済学的な雰囲気^{きふき}を漂わせてはいるものの、所詮は比喩以上のものではない。また、同じ第四章では『人間本性論』第二・三編におけるヒュームの経済思想の萌芽が分析されているが、この点を知るには、著者も参照しているフィンレイ（Christopher J. Finlay, *Hume's Social Philosophy: Human Nature and Commercial Sociability in a Treatise of Human Nature*, Continuum, 2007）の分析の方がまとまっている。

そもそも、ヒュームという著述家・思想家の文体を論じるのであれば、彼の宗教論、とくに「自然宗教をめぐる対話」における対話形式や、『イングランド史』における対立する立場の叙述が扱われてしかるべきである。だが、著者の中心的な関心はヒュームの経済思想にあるらしく、それらの著作についての分析はほぼ行われない。したがって、ボックス（M. A. Box, *The Suasive Art of David Hume*, Princeton Univ. Press, 1990）やポトケイ（Adam Potkay, *The Fate of Eloquence in the Age of Hume*, Cornell Univ. Press, 1994）といった文学（史）研究者によるヒュームのスタイル分析を参照しているものの、

ヒュームのスタイルを irony/ironical (pp. 95, 99) と特徴づけているわりにプライスの *Ironic Hume* (John Valdimir Price, *The Ironic Hume*, Univ. of Texas Press, 1965. Rep. Thoemmes Press, 1992) への言及はない。こうして著者はかなり選択的に『人間本性論』、『摘要』, 「エッセイの書き方について」におけるいくつかの段落を取り上げ、ヒュームがいかにか「要約」し, 「具体例」を用いているかを例証していく。以上が主に本書前半の議論である。

後半(第五～八章)の第五・六章ではヒュームの経済思想の内容が解説されているが、それほど独自性があるわけでもなく、いわゆる経済(社会)思想史における最新の研究がフォローされているわけでもない。この点について著者は、ヒュームの経済思想研究における二次文献が膨大であることを認め、本書が、完全な素人でも専門の研究者でもない中間の読者に情報を与えることを目的としている、と述べている(p. xvi)。たしかに、貨幣論についてはウエナリンドやシェイバスの議論が参照されているが、近年、ヒュームの経済思想に着目している政治思想史系の研究——たとえばイシュトヴァン・ホント、ジョン・ロバートソンらの研究——は文献に挙がっていない(当然、ダンカン・フォーブズにも言及はない)。

さらに、『イングランド史』の補遺 Appendix などにおける経済学的な議論については、まったく触れられていない(『イングランド史』におけるヒュームの経済分析については、ダンフォードによる先駆的な研究 [John W. Danford, "Hume's History and the Parameters of Economic Development," in Nicholas Capaldi and Donald W. Livingston, *Liberty in Hume's History of England*, Kluwer Academic Publishers, 1990] があるが、それにも触れられていない)。したがって、経済思想に詳しくないヒューム研究者がヒュームの経済思想に関する概説的な情報を得るためにこの本を読んでも、参照している文献に偏りが

大きく、有益とは思えない。もちろん、ヒューム経済思想の形成を知る上で貴重な資料である「初期覚え書き Early Memoranda」への言及もない。(誤解のないように付け加えておくと、私はここで、個別の文献への参照が抜けていることをあげつらうことで安易な批判をしようとしているわけではない。著者自身の問題設定に照らして、著者による文献の選択や議論の範囲の限定が適切に行われているとは言えないことを指摘したいだけである。)

要するに、ヒュームの文体論と経済思想はそれぞれ重要ではあるのだが、彼が残した著作全体の割合からしたら分量的に必ずしも圧倒的な割合を占めているとは言えない狭義の経済思想系の論説群を、文体という視角だけからアプローチすることに無理があるのだ。それを一冊の本にしようと思えば、前半では経済思想とは直接には関わらない著作における文体の考察に議論を割きつつ、後半では文体の問題とはそれほど関わらないヒューム経済思想の解説をするという中途半端な結果に陥らざるを得ない。たしかに、著者は本書の冒頭において、文体からのアプローチについては『人間本性論』から『政治論集』までと考察の範囲を区切り、『イングランド史』「自然宗教に関する対話」といったヒュームの文体を考える上で重要な著作をあらかじめ除外している。他方、ヒュームの経済思想については必ずしも専門的な議論をするつもりはない、と予防線を張っていてもいる。だが、こうした議論の範囲の限定や専門性の程度づけが、著者が果たそうとしている目的を当初から大きく損なっている感は否めない。ヒュームのように多岐にわたる著述活動をした思想家についてのモノグラフを書く場合には、適切な問題設定をするだけでなく、それに見合った議論の範囲の設定が重要であることを改めて痛感させられた次第である。

(壽里 竜：関西大学)